

日本の高校歴史教科書における東アジア古代史叙述

金 静美 (조선사연구회/일본)

<目次>

- I、日本の教科書における日本ナショナリズムの要因
- II、日本の高校世界史教科書における朝鮮古代史叙述
- III、日本の高校日本史教科書における朝鮮古代史叙述
- IV、東アジア古代史記述の根本問題——国家・民族・領土——
- V、なぜ、日本の歴史教科書で東アジア古代全史が叙述されないのか
- VI、東アジア共通のインターナショナルな歴史教科書叙述をめざして

I、日本の歴史教科書における日本ナショナリズムの要因

1、教科書検定制度

日本政府は1871年に文部省を設定し、1872年に「学制」を確定した。この「学制」においては、教科書は、自由発行・自由採択制だった。

1880年から文部省は「教科書取調べ」を開始して自由採択制を廃止し、1883年から認可制にした。

1886年に日本政府は、「教科用図書検定条例」を公布し、文部大臣による教科書検定を開始し、さらに、1887年に、「教科用図書検定条例」を廃止し、「教科用図書検定規則」を制定した。

1889年2月11日に日本政府は「大日本帝国憲法」を發布し、天皇制を強化した。翌1890年10月30日に日本政府は、天皇の名で、「教育ニ関スル勅語」をだした。

その後、1945年まで、半世紀以上におわたって、日本では、「教育勅語」にもとづく「尊王愛国」を機軸とした学校教育が行われ、子どもたちに天皇主義・侵略思想が植えつけられた。

日清戦争開始2か月後、1904年4月から、日本政府は、「国語読本」・「書き方手本」・「修身」・

「日本歴史」・「地理」の教科書を国定化し、翌1905年に「算術」・「図画」の教科書を国定化し、1910年に「理科」の教科書をも国定化し、小学校教科書をすべて国定化した。

1945年8月のアジア太平洋戦争敗北後も1946年7月末まで、それまでと同じ国定教科書が使われたが、その多くの部分に、生徒たちは、教師の支持に従って、墨を塗ったり、紙を張ったりした。切りとった場合もあった。

1946年4月から、一部地域で暫定教科書が使われはじめた。

1947年9月に文部省は、国定教科書のほかに検定教科書を使用することにし、1948年4月に「教科用図書検定規則」を、7月に教科書の発行に関する臨時措置法をつくった。

1949年4月から検定教科書が使われはじめた。

日本政府は、教科書検定制度によって、自然科学の分野においてもそうであったが、とくに歴史教科書における歴史事実の記述内容にかかわって管理・介入をおこなってきた。

20世紀末、1999年8月13日に、日本は、侵略の旗「ヒノマル」を国旗とし、天皇賛歌「キミガヨ」を国歌とし、その12日後の8月25日に、他地域・他国軍事侵略のための「周辺事態法」を施行した。このころから、日本政府は、教科書検定制度を利用して、歴史教科書の「記述の誤記」を指摘すると称して、児童や生徒にいつわりの史実を教え、日本ナショナリズムを注入しようとする策動を、いちだんと強化しはじめた。

21世紀はじめ、2001年12月、アジア太平洋戦争後はじめて日本軍が侵略戦争に参戦した。おなじころ、日本政府は、教科書検定制度を利用して偽りの歴史の宣伝策動を強化しはじめた。日本文部科学省が、歴史事実を極度に歪曲した中学校社会科歴史的分野用教科書「新しい歴史教科書」（扶桑社）をはじめて検定通過させたのは2001年であった（2001年採択率、推計0.097%）。

日本文部科学省は、2008年4月から使用される高校の日本史教科書を検定する際、アジア太平洋戦争末期の沖縄での集団自決について、それまで認めていた「日本軍の強制」とする記述にかんして「沖縄戦の実態について誤解するおそれのある表現である」と検定意見をつけた。これに従って教科書会社は、歴史的事実を歪曲し、日本軍による強制がなかったかのように文章を変えた。

たとえば、清水書院の日本史Bは、「非戦闘員の犠牲者も多かった。なかには日本軍に集団自決を強制された人もいた」という原文を、「非戦闘員の犠牲者も多かった。なかには集団自

決に追い込まれた人々もいた」と変更して、検定を通過した。

沖縄戦のさいに日本軍が住民に集団自決を強制したという記述を教科書から一斉に削除させてことに対して、2007年6月22日に沖縄県議会は検定意見を撤回して記述をもとにもどすことを要求する意見書を全会一致で可決した。この意見書には、「集団自決は日本軍による関与なしには起こり得なかったのは紛れもない事実」と書かれている。

2、歴史教科書執筆者の歴史観・歴史思想

日本の歴史教科書が、日本ナショナリズムを強化するものとなっているのは、日本政府が教科書検定制度をおこなっているからだけではない。

検定制度とともに重大な要因は、歴史教科書執筆者のイデオロギー・歴史観・歴史思想が、日本ナショナリズムを克服できていないことである。

もちろん、多数の歴史教科書が、単一のイデオロギーや歴史観や歴史思想にもとづいて書かれているのではない。それぞれの教科書における日本ナショナリズムの強弱は一樣ではない。

以下で、2007年3月22日に日本文部科学省の検定を通過した日本の高等学校歴史教科書における東アジア古代史記述を検討し、それぞれの教科書における日本ナショナリズムの濃淡を具体的に分析する。

これらの歴史教科書は、すべて、現在（2008年5月）、日本の高等学校で使用されているものである。

Ⅱ、日本の高校世界史教科書における朝鮮古代史叙述

■ 新版「世界史」A（著者、木畑洋一ほか6人）、実教出版。

本書には、古朝鮮、百濟・新羅・渤海にかんする記述はまったくなく、高句麗にかんしても、「[隋は]大運河建設や高句麗遠征に人民を大量に動員」と書かれているだけで、高句麗にかんする直接的な記述はない。

■「世界史」A(著者、加藤晴康ほか8人)、東京書籍。

本書にはじめて現われる朝鮮にかんする叙述は、つぎのようなものである。

「4世紀になると朝鮮半島では高句麗(コグリョ)に加えて南部に百済(ペクチェ)と新羅(シルラ)が成立し、日本列島でも大和政権の成立をみた。これらの国々は、南北の中国王朝から冊封を受けつつ、それぞれ勢力の拡大をはかった」(12頁)。

このほかの朝鮮古代・中世史にかんする叙述は、つぎのようなものだけである。

「朝鮮半島では、7世紀後半に唐と結んだ新羅が百済・高句麗を滅ぼし、唐の勢力をしりぞけて朝鮮半島の統一をなしとげ、また、唐の冊封を受けた。日本は、7世紀から遣隋使、遣唐使を派遣して、隋、唐の律令体制などをとりいれようとつとめ、新羅や渤海とも交流した」(13頁)。

「中国の東北部では、モンゴル系の契丹族が渤海を滅ぼして遼をたて、モンゴル高原や中国の北辺をも支配下にくみ入れた。

朝鮮半島では高麗(コリョ)が新羅(シルラ)を滅ぼして全土を統一し、宋や遼の冊封を受け、金属活字や高麗青磁などのすぐれた文化をつくりだした」(14頁)。

「7世紀ごろから9世紀なかごろまで、中国、朝鮮、日本におよぶ東方海域での貿易は新羅(シルラ)商人が独占していた。ややおくれて渤海による活動が始まり、8世紀以降、日本海をわたって日本に來航する渤海の使節は、やがて貿易を主目的とするようになった。また、渤海の商船は中国にまでおよんでいた」(44頁)。

■高等学校「世界史」B改定版(著者、鶴間和幸ほか12人)、清水書院。

本書の高句麗、百済、新羅、高麗にかんする叙述はつぎのとおりである。

「楽浪郡と帯方郡は中国王朝の朝鮮半島支配の拠点であり、倭の女王卑弥呼の使者も帯方郡を経由して都洛陽入り、魏から冊封うけている、しかし、五胡十六国時代の華北の混乱のなか、朝鮮半島の諸民族がしだいに台頭してきた。4世紀初めに、楽浪郡は高句麗(コグリョ)に、帯方郡も朝鮮半島南部の韓族などに滅ぼされた。こうして4世紀もの長きにわたった中国王朝の朝鮮半島支配は終わった。

この時期、百済(ペクチェ)、新羅(シルラ)が建国され、鴨緑江(アムノックカン)中流の国内城(中国吉林(チーリン)省集安(チーアン))に拠点を置いた北方の高句麗とならんで朝鮮半島は三国時代に入った」(36～37頁)。

「唐と連合した新羅は百済(ペクチェ)・高句麗(コグリョ)を滅ぼし、朝鮮半島における三国対立の形勢は終わった」(39頁)。

「朝鮮では、9世紀後半には新羅(シルラ)が分裂状態となり、やがて王建(ワンゴン)が高麗(コリョ)を建国して統一を達成した。高麗は、唐・宋にならって、官僚制や科挙を採用して中央集権化に努め、11世紀に全盛期を迎えた」(80頁)。

本書には、「朝鮮三国 6世紀中ごろ」と題された地図が掲載されているが、そこでは、鴨緑江北方地域が高句麗の領域内とされている(37頁)。また、本書に掲載されている「唐代の東アジア」と題された地図では、渤海が唐の領域内に入れられている(38頁)。

■ 新詳「世界史」B(著者、川比総ほか8人)、帝国書院

本書には、「東アジア周縁地域の国家形成」という項があり、つぎのように書かれている。

「朝鮮半島では、前4～前3世紀には在地の政治集団が成長する一方、半島東北部から遼東(リャオトン)半島にかけて戦国七雄の燕が勢力をのび、秦漢交替期に燕出身の衛満が衛氏朝鮮を建てた。漢の武帝はこれを滅ぼして楽浪など4郡をおいたが、北方の部族が高句麗(コグリョ)を建て、半島南部では韓族が馬韓・辰韓・弁韓などの諸国を形成したため、漢の勢力はしだいに後退した」(45頁)。

また、本書の「東アジア諸国家の形成」の項には、つぎのように書かれている。

「3世紀以降、東方の朝鮮半島・日本列島でも諸勢力の活動が活発化し、国家形成が進展するとともに中国大陆との通交が積極的に行われた。倭とよばれ小国に分かれていた日本列島では、大和政権がしだいに強大化した。5世紀にはたびたび倭国の王(倭の五王)が南朝に朝貢し、また朝鮮半島南部にも介入した。

朝鮮半島では、4世紀以来高句麗(コグリョ)・百済(ペクチェ)・新羅(シルラ)の三国が並立していたが、唐と結んだ新羅が百済・高句麗を滅ぼし、ついで唐も排除して676年に最初の統一国家となった。

その北方では、7世紀末に大柁栄が高句麗の遺民をひきいて渤海を建て、日本海を通じて日本ともさかんに通交した」(58頁)。

本書に掲載されている「唐の領域」と題された地図では、渤海が唐の領域内に入れられている(55頁)。

■ 新「世界史」B改定版(著者、弓削達ほか10人)、山川出版社。

本書における朝鮮古代史にかんする叙述はつぎのとおりである。

「(前漢の武帝は)東北方面では衛氏朝鮮をほろぼして東北部の南部から朝鮮半島にかけて楽浪など4郡をおいた」(75頁)。

「(隋の)煬帝は……高句麗を三たび攻めた。しかし高句麗遠征に失敗し、動乱がおこって群雄の一人李淵によってほろぼされた」(85頁)。

「紀元前後に中国の東北部に高句麗がおこり、4世紀初めに南下して楽浪郡および帯方郡をほろぼして、朝鮮半島の北部を支配した。南部は三韓(馬韓・辰韓・弁韓)にわかれていたが、4世紀なかばには半島の西南部では百済が馬韓諸国を統一し、東南部では新羅が辰韓諸国を統一した。このころ日本と密接な関係をもっていた弁韓(加羅、または伽耶ないし任那)は、やがてその北西部の百済に併合され、残る地域も6世紀なかばに新羅に征服され、ここに朝鮮半島は高句麗・新羅・百済がならぶ三国時代にはいった

やがて新羅が強大となり、唐の支援をうけて百済と高句麗をほろぼし、ついで唐の勢力もしりぞけて676年、朝鮮半島をはじめて統一した」(88頁～89頁)。

「高句麗の民は中国の東北部に拠って渤海国をたて、ここでも唐の官制・文化を熱心にとり入れた」(89頁)。

「(日本では)4世紀には大和政権による統一がすすみ、加羅に進出して百済と結び、高句麗に対抗した」(89頁)。

「モンゴル系の契丹族は、東北部ほかモンゴルの諸族を連合させ……926年渤海をほろぼしたのち、遼と称した」(151頁)。

本書に掲載されている「秦・前漢時代のアジア」と題された地図では、楽浪地域が前漢(武帝時代)の領域に入れられているが、その北方の高句麗は、前漢の領域には入れられていない(74頁)。また、本書には、8世紀ころの唐代の東アジア交通路地図が掲載されているが、そこでは、渤海は唐の領域内に入れられていない。

本書には、「日本と密接な関係をもっていた弁韓(加羅、または伽耶ないし任那)」、「4世紀には大和政権による統一がすすみ、加羅に進出して……」という、あいまいな表現で大和政権が加羅地域を支配していたかのような記述がある。こうして、本書は、なんら歴史学的・考古学的証拠がない「任那日本府」を存在したかのように主張している。

Ⅲ、日本の高校日本史教科書における朝鮮古代史叙述

現在、日本の高等学校日本史教科書は、AとBの2種あり、Aの記述はほとんど近現代史に限られている。したがって、ここでは2007年3月22日に日本文部科学省が検定を通過させた日本の高等学校日本史教科書のうちBについてのみ論じる。Bにおいても三国時代以前の朝鮮(扶余、東扶余など)にかんする記述はまったくない。

■「新日本史」B改定版(著者、久留島典子ほか3人)、山川出版社。

本書の年表には、「391年 倭軍、百済・新羅を破る」と書かれているが(397頁)、本文にはこのことに関する記述はない。

同書には、古朝鮮にかんする記述はまったくなく、4世紀以後の朝鮮史にかんしては、つぎのように書かれている。

「朝鮮半島の3国のうち、北にあった強国の高句麗は、313年に晋の朝鮮半島支配の拠点である楽浪郡と帯方郡を滅ぼし、さらに旧楽浪郡の平壤を拠点として南下策をとり始めた。一方、朝鮮半島南部では、4世紀前半に馬韓から百済が、辰韓から新羅が建国し、百済は高句麗の南下を受けて、倭に近づいて同盟を結んだ(29～30頁)。

「倭は、4世紀には朝鮮半島南部の弁韓地域にあった伽耶諸国(加羅)と密接な関係を持ち、鉄資源を確保した。そこは生産技術を輸入する半島の拠点であり、倭人も集団的に移住していたらしい(30頁)。

「高句麗は、4世紀後半に南下を続け、広開土王の一代の功業を記した広開土王碑(広太王碑、中国吉林省集安市)には、高句麗が倭に通じた百済を討ち、倭に侵入を受けた新羅を救い、400年、404年に倭軍と交戦して勝利を得たことが記されている。鉄や文物の供与を受けていた倭は、伽耶や百済の要請で派兵し、軍事援助をしたらしい(30頁)。

「朝鮮半島では、6世紀に入ると、百済・新羅とも勢力を強めたが、百済は強国高句麗の南下を受けて南遷し、512年、ヤマト政権は朝鮮半島南部の伽耶諸国のうち、西部の4つの国(「任那四国」と称した)を百済が支配することを承認した。さらに新羅も強大化し、562年までに伽耶諸国は百済と新羅の支配下にはいつて滅亡し、ヤマト政権も半島における拠点を失った。

伽耶西部に対する支配の承認と引きかえに、百済から513年に五経博士が渡来し、さらに易

博士・歴博士・医博士も渡来し、儒教やその他の学術が伝えられた。また、538年(一説に552年)に、百濟聖明王から仏教も伝えられた」(33頁)。

この教科書の筆者は、「らしい」というあいまいな表現をくりかえして、いいかげんな史実記述をしているだけでなく、民衆が歴史を動かすという歴史観と対立する歴史観によって書かれている。この教科書に従って授業がなされるならば、生徒は、いつもの歴史を宣伝されるだけでなく、権力者が歴史を動かすというあやまった歴史観をおしつけられてしまう。

■「高校日本史」B改定版(著者、石井進ほか12人)、山川出版社。

本書は、「新日本史」Bと同じ出版社からだされている教科書だが、「新日本史」Bの記述のように悪質ではない。

「高校日本史」Bの年表には、「新日本史」Bにあるような「391年 倭軍、百濟・新羅を破る」という史実と異なる記述はなく、4世紀の部分には、「このころヤマト政権、統一進む」と書かれている。

朝鮮古代史にかんして、同書には、つぎのように書かれている。

「中国東北地方から朝鮮半島北部に国家をつくった高句麗の王、広開土王の碑には、倭の兵が辛卯の年(391年)以降、朝鮮半島にわたり、高句麗軍とたたかったことが刻まれている」(20頁)。

「4世紀の朝鮮半島 半島南部の加耶は加羅とも表記され、それ以前に弁韓よばれていた国ぐにを総称したものである。一方馬韓の国ぐにから百済が建国されたが、半島南西部は百済に属するの加耶に属するのかがまだよくわかっていない」(21頁)。

「ヤマト政権はあたらしい文化や鉄資源を求めてはやくから朝鮮半島南部と深いつながりを持っていたが、4世紀後半に北方の高句麗が南へ進出してきたため、百済などとともに高句麗とたたかうことになったのである」(20頁)。

「6世紀をむかえると、朝鮮半島では高句麗がいちだんと勢力を強めて南下した。これにおされた百済・新羅は、国内の支配体制をかためるとともに、ヤマト政権とも結びつきの強い加耶諸国へ進出するようになった」(26頁)。

「6世紀前半の朝鮮半島 高句麗の南下と新羅の西進を受けて、百済は南に勢力を広げ、加耶西部を支配におさめた」(26頁)。

「562年、新羅はついに加耶諸国を支配下におさめ、ヤマト政権は朝鮮半島への足がかりを失ったのである」(27頁)。

「[倭(日本)は]国内では豪族の力がまだ強かった。国外では唐と結んだ新羅にほろぼされた百済をたすけるために軍をおくったが、663年の白村江の戦いで唐・新羅軍に大敗し、半島からしりぞくことになった」(31頁)。

「907年、唐がほろぶと東アジアは大変動期に入り、渤海もほろび、朝鮮半島では高麗がおこり新羅がほろんだ」(54頁)。

■「日本史」B改定版(著者、脇田修ほか14人)、実教出版社。

本書では、年表の4世紀の部分に、「このころ大和政権の形成すすむ 4世紀末ごろ、倭軍朝鮮半島に侵出。百済とむすび、新羅・高句麗とたたかう」と書かれており、6世紀の部分に「562 新羅、加羅を滅ぼす」と書かれている。

本文には、

「6世紀には朝鮮との交流がいつそう密接になり、中国の宗教や学問も流入・受容された。百済から五経博士や易・歴・医の諸博士が渡来して、儒教その他の知識を伝えた」(52～53頁)と書かれている。

■「高校日本史」B新訂版(著者、宮原武夫ほか15人)、実教出版。

本書の年表には、「4世紀末ごろ、倭軍朝鮮半島に侵出。百済とむすび、新羅・高句麗とたたかう」と書かれている。

本文には、つぎのように書かれている。

「奴国王・邪馬台国王・倭の五王、高句麗・百済・新羅の国王は、いずれも冊封体制のなかで、その地位を中国皇帝から公認されていた」(22頁)。

「中国の朝鮮半島に対する支配力が衰えると、中国東北部に本拠地をもつ高句麗が、中国が設置した楽浪郡、帯方郡を滅ぼして朝鮮半島北部に勢力をのび、南下政策をすすめた。南部には馬韓・辰韓・弁韓の3つの小国による連合が形成されていたが、4世紀には馬韓から百済が、辰韓からは新羅がうまれた。朝鮮のすぐれた生産技術や鉄資源を求めた大和政権は、弁韓の地域に成立した加羅諸国(伽耶、任那)に4世紀後半、百済とむすんで出兵した。さらに新

羅を圧迫し、北方の高句麗とたたかった。これに対して高句麗は、新羅を救援し、百済を攻めて、倭の軍隊とたたかった。この間の事情は高句麗の好太王の碑文に記されている。

5世紀にはいり、百済・新羅の国力が充実してくると、朝鮮半島における大和政権の勢力はしだいに弱まった（23頁）。

本書では、「歴史のまど 三韓の調」と題して、つぎのような根拠の不確かな、おけのわからないことが書かれている。

「645年（大化元）年6月12日、中大兄皇子と中臣鎌足（のちの藤原鎌足）らは、飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿を殺し、大化の改新がはじまった。なぜこの日が暗殺に選ばれたのだろうか。それは、この日に三韓の使者が調を献上することになっていたからであった。三韓とは高句麗・百済・新羅の3国のことで、調とは服属を表す献上品を意味する。つまり、朝鮮3国が大和政権に服属していることを確認する重要な儀式の日にあたったため、天皇（大王）をはじめ群臣は必ず出席しなければならなかったのである。

しかし、実際には、3国とも倭国に統合されておらず、使者を送る義務はなかった（30頁）。

ここで、筆者は、「服属」と「統合」を同義語として使い、「朝鮮3国が大和政権に服属していることを確認する重要な儀式の日にあたったため」などという虚偽を書いている。このような記述は、ほかの教科書にはない。

■「日本史」B改定版(著者、青木美智男ほか12人)、三省堂。

本書には、つぎのように書かれている。

「313年、中国東北地方から朝鮮半島北部へ勢力を広げていた高句麗が中国の直轄地である楽浪郡を滅ぼした。馬韓・辰韓・弁韓という三つの小国連合体が分立していた半島南部では、4世紀なかごろ、馬韓と辰韓はそれぞれ百済・新羅に統一され、南端の弁韓はいぜん伽耶（加羅）とよばれる小国家連合体がつづいていた。4世紀後半には高句麗が南下して百済や伽耶との間で対立を深めた。中国の直接支配からはなれて戦乱をくりかえす朝鮮半島の動きは、伽耶や百済を足がかりにして、鉄などの資源や農業・土木・建築、各手工業の技術を手に入れようとするヤマト王権（倭）にとって大きなできごとであった」（19頁）。

「朝鮮半島では、5世紀後半から6世紀にかけて、新羅や高句麗が領土拡大につとめ、百済や伽耶に侵入しはじめた。

527年、ヤマト王権はつながりの深かった伽耶へ援軍を派遣しようとしたが、新羅とむすんだとされる筑紫の国造磐井によってこれをはばまれた（磐井の乱）。さらに、外交を担当していた大連の犬養金村が百済に伽耶の領土への拡大をみとめたこともあって、新羅と百済の伽耶への侵入は強まり、562年、伽耶は新羅に滅ぼされた（24頁）。

「朝鮮半島では、高句麗や新羅が唐の律令を摂取して、国力の充実につとめたが、唐が高句麗に遠征すると、新羅は唐に急接近し、百済は倭とのつながりを深めようとした」（28頁）。

「7世紀前半、朝鮮半島では新羅が勢力を増し、660年、百済を滅亡させた。孝徳天皇にかわった斉明天皇のころ、朝廷は復興をはかる百済の遺臣の要請にこたえて大軍を派遣したが、663年、朝鮮半島南部の白村江で新羅・唐の連合軍に大敗した（白村江の戦い）。さらに新羅は高句麗も滅ぼし、676年に朝鮮半島を統一した」（29頁～30頁）。

■「日本史」B改定版（著者、加藤友康ほか10人）、清水書院。

本書には、つぎのように書かれている。

「朝鮮半島北部には、中国東北部からおこった高句麗が侵入し、313年、楽浪郡を滅ぼし、強力な統治機構を形成した。南部においてもそれまで韓族が馬韓・辰韓・弁韓（弁辰）などの部族的の小国を形成していたが、馬韓地方では百済、辰韓地方では新羅が国家形成へと向かいはじめた」（26頁）。

「4世紀後半から5世紀にかけて、朝鮮半島では、高句麗・百済・新羅の3国が対立抗争をくり返した。とくに高句麗の勢力は強大でたびたび南下し、百済と新羅は滅亡の危機を迎えている。そこで新羅は高句麗の支配下にはいり、百済は倭国と同盟関係を結んで、これに対抗した。……4世紀末に倭国は百済の求めに応じて、海を渡って高句麗と戦っている。倭国と百済の交流は、ヤマト政権に先進的な文化や知識をもたらした。これによりヤマト政権は外交権や先進技術を独占することになり、倭国内におけるより優位な立場を得ることになった」（27頁）。

「朝鮮半島では、中国王朝の影響力の低下もあって、高句麗・百済・新羅の抗争がいつそうはげしくなった。高句麗の軍事的圧迫に苦しむ百済と新羅は、倭国と友好関係にあった伽耶諸国に進出し、560年代にこれら諸国を併合した」（31頁）。

IV、東アジア古代史記述の根本問題——國家・民族・領土——

近現代史の時代は、国民国家の形成の時代であり、古代は、国家と民族の形成の時代である。原始時代には、国家も民族も形成されていなかった。

科学的に歴史を叙述するためには、国家・民族・国家権力・領土にかんする基本理論を構築していなければならない。

この基本理論を確立しようとせず、国家概念や民族規定をあいまいにしたまま、恣意的におこなわれる国家史や民族史についての歴史叙述は、無意味であるだけでなく、誤ったものとならざるを得ない。

たとえば、日本のナショナリストが執筆した中学社会教科書「新しい歴史教科書」(2005年3月30日検定通過、扶桑社)では、「神話」を根拠にして太古に日本国家が形成されていたかのような叙述がなされている。

近現代における国民国家と古代の国家とは、国家の概念が異なる。近現代における国民国家概念を古代の国家概念とを同一化し、近現代の国民国家の領土を古代国家の領土と重ね合わせて一国史を叙述することは、ナショナリズムを扇動することであり、歴史家がおこなってはならないことである。

国家概念、民族規定を明確にしておかなければ、近現代史はもちろん、古代史を科学的に客観的に叙述することはできない。

たとえば、高句麗史を叙述する場合には、その前提として、この時代の東アジア全地域における諸国家・諸民族の実態とともに、国家概念と民族規定を明確にしておかなければならない。

国家も民族も歴史的に形成されてきたものであって、東アジアにおいても、古代から一貫して、現在の中国国家、モンゴル国家、朝鮮国家、日本国家が実在していたのではない。また、近現代のすべての国家は、多民族国家なのであって、近現代のすべての国家の歴史は、単一の民族の歴史とは同一ではない。

国民国家における自国史教育は、ナショナリズムと無縁ではありえない。

特に、国民国家形成を他地域・他国侵略によって開始し、継続的な他地域・他国侵略によって国家建設をすすめてきた侵略国家日本においては、自国史教育は、他地域・他国侵略の歴史事実を明らかにし、それを否定するものでない限り、日本ナショナリズムを扇動する

教育となる。

国民国家中国の一国史もまた、その前史である明・清時代の他地域・他国侵略の歴史を肯定するイデオロギーと無縁ではない。東北工程は、そのようなイデオロギーを前提としている。

東アジア古代史は、東アジアにおける国家と民族の形成期の歴史であるが、その国家と民族は、国民国家形成期である近現代史における国家と民族とは、同質ではない。また、東アジア古代における諸国家の領土は、近現代における諸国家の領土とは同一ではない。

東アジア古代における諸国家で生活する人びとの人種も多様であり、言語も多様であった。東アジア古代の諸国家も多民族国家であった。

V、日本の歴史教科書が東アジア古代全史を叙述しようとしなのはなぜか

日本の歴史教科書の東アジア古代史叙述は、中国古代史を中心におこなわれており、東アジア全体の統一的な歴史を生徒が把握しにくくなっている。

また、王朝史が中心となっており、歴史の主体である民衆の歴史が書かれていない。

このような叙述は、日本の教科書にたいする検定制度によるためでなく、歴史教科書の執筆者が、権力者の動向によって歴史がつくられるという非民衆的な歴史思想、政治思想を克服していないからである。日本の歴史教科書執筆者のほとんどが、歴史を総体とし把握する思想と方法を確立できていないからである。

この問題は、かれらが自己の内部のナショナリズムを点検し克服しようとしていない問題とむすびついている。

東アジアの古代史は、東アジア地域における諸民族の複雑な関係の歴史である。漢や唐の王朝史と、高句麗、新羅、百済や渤海や大和国家の関係のみで叙述できる歴史ではない。

たとえば、「高校日本史」B新訂版(宮原武夫ほか著、実教出版)には、

「907年、唐がほろびと東アジアは大変動期に入り、渤海もほろび、朝鮮半島では高麗がおり新羅がほろんだ」(54頁)

と書かれているが、渤海の崩壊(926年)も新羅の崩壊(935年)も、唐帝国の崩壊のみに基づくものではない。渤海地域、新羅地域の複雑な社会関係に触れることのない歴史教科書の叙述は、生徒の歴史意識形成にとって有害である。

東アジア古代史を総体として叙述しようとするならば、王朝史を機軸とする歴史叙述を根本的に方法的に否定しなければならず、王朝史叙述に内包されているナショナリズムを克服しなければならない。

王朝史を克服するということは、王朝の崩壊は、その政權下で抑圧されていたさまざまな民族の民衆の解放を意味するという歴史思想・政治思想を鍛えるということを意味する。

これは、歴史研究方法の問題でもある。

VI、東アジア共通のインターナショナルな歴史教科書叙述をめざして

1960年に、上原専祿編『日本国民の世界史』（岩波書店）が出版された。本書の原本は、1956年から日本の高校社会科の世界史教科書として使用されていたものであるが、1956年の学習指導要領の改定にともない、1959年度以後は継続使用できなくなった。

筆者（上原専祿ほか6人）は、その原本を全面的に改稿し、その新稿を1957年の検定に提出したが、不合格になった。筆者はさらに誤記・誤植を訂正して1958年7月にふたたび検定に提出したが、これも同年11月に不合格とされた。

筆者は、書物全体の構造と内容の根本にふれる検定をこれ以上は容認できないとして、本書を教科書として出版する試みをやめ、独自に本書を出版した。

本書は、検定を拒否し、筆者の歴史思想・歴史観の表現を、日本国家権力をふくむ他者に妨害されることなく、独自に出版されたものである。

だが、『日本国民の世界史』と名づけられた本書の叙述は、根深い日本ナショナリズムに貫かれている。

本書の筆者は、ヨーロッパ中心史観を克服できておらず、民衆を歴史の主体とする歴史意識も希薄である。世界史的な東アジア史の民衆運動にかんする叙述はきわめて少ない。

日本植民地支配下の朝鮮における最大規模の民衆運動である3・1独立運動にかんする記述がない（同じ1919年の中国での五・四運動についての記述はある）。イスラエルのパレスチナ侵略にかんしても、「国連の決定に基づいて、1948年5月、パレスチナにはユダヤ人のイスラエル共和国が建設された」という、シオニストによるパレスチナ占領支配を肯定する虚偽が書かれている。

また、本書には、敗戦後の日本について、「日本では降伏後、1946年11月、あらたに“日本

国憲法が公布され、戦争を放棄することが明示された」と書かれているが、日本国民が天皇ヒロヒトの侵略責任(植民地支配責任・戦争責任・戦後責任・現在責任)を追究せず、天皇制を維持し続けてきていることが書かれていない。

この『日本国民の世界史』が示しているように、検定とは別の次元で、日本の歴史教科書に内在している日本ナショナリズムは、いまでも、克服されていない。

歴史教育は、生徒に史実を教える教育ではない。

史実は教えることはできない。

教えることができるのは、史実をいかに認識するかという歴史認識の方法である。

史実認識の方法と内容は、認識者の歴史思想・歴史観によって規定される。

きのう起こったこと、すなわち、きのうの史実をいかに認識するかということも、認識者の社会意識・社会思想に規定される。

70年まえの史実認識においても同じである。

日本政府の首相や一部の国会議員などが、日本軍性奴隷制にかんして日本政府や日本軍に直接責任はないと強弁しているが、かれらの歴史認識は、かれらの利害、かれらの思想に規定されている。

歴史教育の場においては、このような無恥であやまった歴史認識をもつ者を育てない教育をおこなわなければならない。

1910年、「韓国併合」に反対する思想・歴史意識をもつ日本人はほとんどいなかった。

国民国家日本の教育は、他地域・他国侵略を肯定し支持し加担する日本人をつくりだす教育であった。そのような教育の中心は歴史教育であった。

歴史教育の場で、教師は、生徒に史実を教えるのではなく、史実を認識する方法を生徒とともに考えなければならない。歴史教科書は、そのための道具である。歴史教科書の叙述を史実であると誤解してはならない。

歴史教育の場において、教師は、歴史の真実に到達するための方法を生徒とともに語りあわなければならない。日本の歴史教科書に示されている日本ナショナリズムを克服することは簡単ではない。

日本では、在日朝鮮人の子どもの多くも、日本の学校で、日本の歴史教科書を使わされている。日本の歴史教科書を変革していくことは、在日朝鮮人の課題でもある。

この課題は、東アジアにおける共通の国際的な歴史教科書叙述をめざす民衆運動のなかで達成されるだろう。

■ 付記

教科書の引用文中の太字は、原文に従っている。

また、国名などのうしろの内の文字は、原文にルビとして付けられている読み方である。たとえば高句麗という文字の上に“コグリョ”という朝鮮語読みのルビが付けられている場合には、高句麗（コグリョ）とした。

ただし、日本読みのルビがつけられている場合は無視した。たとえば高句麗という文字に“こうくり”というルビが付けられている場合には、高句麗（こうくり）とせず、たんに高句麗とした。

国家と民族と言語の問題を生徒とともに考えようとする歴史教科書において、地名や国名の読み方をどのように表記するかは、重大な問題である。

検討した教科書

- 新版「世界史」A（著者、木畑洋一ほか6人）、実教出版。
- 「世界史」A（著者、加藤晴康ほか8人）、東京書籍。
- 高等学校「世界史」B改定版（著者、鶴間和幸ほか12人）、清水書院。
- 新詳「世界史」B（著者、川比稔ほか8人）、帝国書院。
- 新「世界史」B改定版（著者、弓削勉ほか10人）、山川出版社。
- 「新日本史」B改定版（著者、久留島典子ほか3人）、山川出版社。
- 「高校日本史」B改定版（著者、石井進ほか12人）、山川出版社。
- 「日本史」B改定版（著者、脇田修ほか14人）、実教出版。
- 「高校日本史」B新訂版（著者、宮原武夫ほか15人）、実教出版。
- 「日本史」B改定版（著者、青木美智男ほか12人）、三省堂。
- 「日本史」B改定版（著者、加藤友康ほか10人）、清水書院。

【参考文献】

- 唐澤富太郎「教科書の歴史」創文社、1963年。
- 家永三郎「教科書検定 教育をゆかめる教育行政」日本評論社、1965年。
- 家永三郎「教育裁判と抵抗の思想」三省堂、1969年。
- 五十嵐順・伊ヶ崎暁生編著「戦後教育の歴史」青木書店、1970年。
- 鬼頭清明「日本古代国家の形成と東アジア」校倉書房、1976年。
- 大田堯編著「戦後日本教育史」岩波書店、1978年。
- 学校制度を考える会編「教科書はもういらない」三一書房、1982年。
- 出版労連教科書対策委員会編「『日本史』『世界史』検定資料集復活する日本軍国主義と歴史教科書」日本出版労働組合連合会、1982年。
- 遠山茂樹編「教科書検定の思想と歴史教育：歴史家は証言する」あゆみ出版、1983年。
- 安川寿之輔「十五年戦争と教育」新日本出版社、1986年。
- 中村紀久二「教科書の社会史」岩波書店、1992年。
- 嵯峨敬全「皇国史観と国定教科書」かもか出版、1993年。
- 俵義文・石山久男「高校教科書検定と今日の教科書問題の焦点」学習の友社、1995年。
- 徳武敏夫「教科書の戦後史」新日本出版社、1995年。
- 金静美「故郷の世界史 解放のインターナショナリズムへ」現代企画室、1996年。
- 網野善彦「日本社会の歴史」上、岩波書店、1997年。
- 李成市「古代東アジアの民族と国家」岩波書店、1998年。
- 王智新ほか編「批判植民地教育史認識」社会評論社、2000年。
- 佐野通夫「近代日本の教育と朝鮮」社会評論社、2000年。
- 石出法太「まちがいだらけの検定合格歴史教科書」青木書店、2001年。
- 永原慶二「歴史教科書をどうつくるか」岩波書店、2001年。
- 和仁康夫「歴史教科書とナショナリズム 歪曲の系譜」社会評論社、2001年。
- 和仁康夫「歴史教科書とアジア 歪曲への反駁」社会評論社、2001年。
- 小森陽一・坂本義和・安丸良夫編「歴史教科書何か問題か」岩波書店、2001年。
- 久保井規夫「消され、ゆかめられた歴史教科書現場教師からの告発と検証」明石書店、2004年。
- 中村哲編著「東アジアの歴史教科書はどう書かれているか」日本評論社、2004年。
- 勅使河原彰「歴史教科書は古代をどう描いてきたか」新日本出版社、2005年。
- 對馬達雄「ナチズム・抵抗運動・戦後教育「過去の克服」の原風景」昭和堂、2006年。

“일본 고등학교 역사교과서에 있어서의 동아시아고대사 서술”

金靜美 (조선사연구회/일본)

<目次>

- I. 일본 교과서에 있어서의 일본내셔널리즘의 요인
- II. 일본 고등학교 세계사교과서에 있어서의 조선고대사 서술
- III. 일본 고등학교 일본사교과서에 있어서의 조선고대사 서술
- IV. 동아시아고대사 기술의 근본문제 국가·민족·영토
- V. 왜 일본의 역사교과서에서 동아시아고대전사가 서술되지 않는가
- VI. 동아시아에서 공동된 인터내셔널적인 역사교과서 서술을 향해

【국문초록】

모든 일본 역사교과서 서술에 있어서 필자의 뿌리깊은 일본내셔널리즘이 나타나고 있다. 그것은 집필자 스스로의 내부의 일본내셔널리즘에 근거된 것이다.

일본 역사교과서에 있어서의 일본내셔널리즘이 일본정부의 강제에 의한 것이 아니라 본질적으로 일본인 역사연구자의 주체적인 내부의 일본내셔널리즘에 근거된 것임이 일본 역사교과서의 근본 문제이다.

국가란 무엇인가, 민족이란 무엇인가를 생각하려고 할 때 고대사(국가와 민족의 형성 과정)의 학습은 중요하다. 고등학교학생이 그것을 학습하는 수단인 고등학교 역사교과서의 역할은 크다.

본고에서는 현재 사용되고 있는 일본 고등학교 역사교과서에 있어서의 동아시아고대사 서술에 대한 분석과 그 사상적·사회적 원인 추구를 통해서 뿌리깊은 침략적 일본내셔널리즘을 극복하는 국민국가 일본의 역사교과서 서술의 가능성을 해명하려고 했다.

일본 역사교과서의 동아시아고대사는 중국고대사를 중심으로 서술되어 있어 동아시아전체의 역사를 학생이 총합적으로 파악하기 어렵게 되어 있다.

또한 왕조사가 중심이 되어 있어 역사의 주체인 민중의 역사가 쓰여져 있지 않다.

이러한 서술은 일본교과서에 대한 검정제도에 의한 것이 아니라 역사교과서의 집필자가

권력자의 동향에 따라 역사가 만들어진다는 비민주적인 역사사상, 정치사상을 극복하고 있지 않기 때문이다. 일본 역사교과서 집필자의 대부분이 역사를 총체적으로 파악하려는 사상과 방법을 확립하지 못하고 있다고 할 수 있을 것이다.

이러한 문제는 그들이 스스로의 내셔널리즘을 점점하고 극복하려고 하지 않는 문제와 연관되어 있다.

동아시아고대사는 동아시아지역에 있어서의 제민족의 복잡한 관계의 역사이다. 한(漢)이나 당(唐)의 왕조사와 고구려, 신라, 백제나 발해나 야마토(大和)국가의 관계만으로 서술할 수 있는 역사는 아니다.

예를 들어 발해의 붕괴(926년)도 신라의 붕괴(935년)도 당제국의 붕괴에만 기초를 둔 것은 아니다. 발해지역이나 신라지역의 복잡한 사회관계들 외면한 역사교과서 서술은 학생의 역사의식 형성에 있어서 유해하다.

동아시아고대사를 총체로서 서술하려면 왕조사를 기축으로 하는 역사서술을 근본적으로 또 방법적으로 부정하지 않으면 안되며 왕조사 서술에 내포되어 있는 내셔널리즘을 극복해야 한다.

왕조사를 극복한다는 것은 왕조의 붕괴는 그 정권하에서 억압되고 있던 다양한 민족의 민중해방을 의미한다는 역사사상·정치사상을 단련하는 것을 뜻한다.

이것은 역사연구 방법의 문제이기도 하다.

근현대사의 시대는 국민국가 형성의 시대이며 고대는 국가와 민족의 형성의 시대이다. 원시시대에는 국가도 민족도 형성되어 있지 않았다.

과학적으로 역사를 서술하기 위하여는 국가·민족·국가권력·영토에 관한 기본이론을 구축하고 있지 않으면 안될 것이다.

이 기본이론을 확립하려고 하지 않고 국가개념이나 민족규정을 애매하게 한 채 자의적으로 행해지는 국가사나 민족사에 대한 역사서술은 무의미하다고 할 수 있을 뿐만 아니라 잘못된 것이 되지 않을 수 없다.

근현대에 있어서의 국민국가와 고대의 국가란 국가개념이 다르다. 근현대에 있어서의 국민국가 개념과 고대의 국가개념을 동일화하여 근현대의 국민국가의 영토를 고대국가의 영토에 투영시켜서 일국사를 서술하는 것은 내셔널리즘을 선동하게 되며 역사가가 해서는 안되는 일이다.

국가개념과 민족규정을 명확하게 해 두지 않으면 근현대사는 물론이며 고대사를 과학적

으로 또한 객관적으로 서술할 수 없을 것이다.

국가도 민족도 역사적으로 형성되어 온 것이며 동아시아에 있어서도 고대부터 일관하여 현재의 중국국가, 몽골국가, 조선국가, 일본국가가 실재하고 있던 것은 아니다.

국민국가에 있어서의 자국사교육은 내셔널리즘과 무관할 수 없다.

특히 국민국가 형성을 타지역·타국 침략에 의해 개시하고 계속적인 타지역·타국 침략에 의해 국가건설을 진행시켜 온 침략국가 일본에 있어서는 자국사 교육은 타지역·타국 침략의 역사사실을 밝히고 그것을 부정하는 것이 아닌 한 일본 내셔널리즘을 선포하는 교육이 된다.

동아시아고대는 동아시아에 있어서의 국가와 민족의 형성기의 역사이지만 그 국가와 민족은 국민 국가 형성기인 근현대사에 있어서의 국가와 민족과 동질적인 것이 아니다. 또 동아시아고대에 있어서의 제국가의 영토는 근현대에 있어서의 제국가의 영토와는 같은 것이 아니다.

동아시아고대의 제국가에서 생활하는 사람들의 인종도 다양하며 언어도 다양했다. 동아시아고대의 제국가도 다민족국가였다.

사실인식의 방법과 내용은 인식자의 역사사상과 역사관에 의해서 규정된다.

1910년에 「한국병합」에 반대하는 사상역사의식을 가진 일본인은 거의 없었다.

국민국가 일본의 교육은 타지역·타국 침략을 긍정하고 지지하고 가담하는 일본인을 계속 만들어 내는 교육이었다. 그러한 교육의 중심은 역사교육이었다.

역사교육의 현장에서 교사는 학생에게 사실을 가르치는 것이 아니라 사실을 인식하는 방법을 학생과 함께 생각하지 않으면 안된다. 역사교과서는 그것을 위한 도구이다.

역사교육의 현장에 있어서 교사는 역사의 진실에 도달하기 위한 방법을 학생과 함께 논의하지 않으면 안될 것이다. 일본 역사교과서에 나타나고 있는 일본내셔널리즘을 극복하는 일은 쉽지 않다.

일본에서는 재일조선인의 학생들도 거의가 일본학교에서 일본 역사교과서들 사용하면서 역사를 배우고 있다. 일본 역사교과서들 번역해 나가는 일은 재일조선인의 과제이기도 하다.

이 과제는 동아시아에 있어서의 공동된 인터내셔널적인 역사교과서 서술을 향한 민중운동 과정에서 달성될 것이다.

【Abstract】

On Descriptions of the Ancient East Asian History in Japanese High School Textbooks

Kim, Jung-Mi (Inst. of Korean History in Tokyo/Japan)

In the description of the history textbook of Japan, author's deeprooted Japanese nationalism is shown.

It is a root problem with the history textbook of Japan that Japanese nationalism in the history textbook of Japan is essentially not due to the compulsion of Japanese Government, but fundamentally based on internal nationalism of Japanese history researchers.

Trying to think what nation is, the study of the ancient history (the origin and process of formations of nations) is very important.

The role of the high school history textbooks that are means by which high school students study the origin and process of formations of nations, is large.

In this text, I analyzed the East Asian ancient history descriptions in high school history textbooks of Japan and tried to clarify the possibility of the description of the history textbook of Japan overcoming the deep-rooted nationalism.

As for the East Asian ancient history description of the history textbook of Japan, Chinese ancient history is mainly done, and the student can not understand a united history in the entire East Asia easily.

Moreover, the dynasty history is centered, and the history of the people who are the subjects of the history is not being written.

Many writers of Japanese history textbooks have not overcome the anti-people history

philosophy and political ideas that the history is made from men of power.

And most of them have not be able to establish ideas and methods grasping the history as a whole.

They do not try to check and overcome their own internal Japanese nationalism.

The ancient history of the East Asia is a history of complex relations of various nations in the East Asian region. It is not a history that can be described only by the relation between a dynasty history, such as Koguryo Kingdom, Silla Kingdom, Pekche Kingdom, Tang Dynasty, and Pohai and Yamato nations.

For instance, neither the collapse of Pallo (in 926 years) nor collapses of Silla Kingdom (in 935 years) are based on only the collapse of the Tang Dynasty empire. The description of history textbooks that does not touch a complex social relation between the Pallo region and the region of Silla Kingdom is harmful for the student's history consideration formation.

Describing the East Asian ancient history wholly, it is necessary to deny the history description that makes the dynasty history fundamentally and it is necessary to overcome the nationalism involved to the history description of the dynasty.

Overcoming the dynasty history, the history thought and political ideas will be able to be established that the collapse of one dynasty means liberating of the people of various nations.

This is a deep problem of the method of researching the history.

The modern age has been an age of the formation of a national nation, and the ancient times were the ages of the formation of the nation. Nations were not formed in primitive times.

It is necessary to construct a basic theory that concerns the nation, the power of the state, and the territory to describe the history in a scientific manner.

The description of the national history done arbitrary with the national concept and the national regulation cannot help becoming not only the meaningless one but also the wrong one.

The concept of the nation in the ancient age is different from the concept of the a nation

-state in the modern age

Overlapping the territory of Japanese nation-states in the modern age with the territory of ancient Japanese nation, and so describing Japanese history is to agitate nationalism.

If neither the national concept nor the national regulations are clarified, ancient history to say nothing of the modern age history cannot be objectively described in a scientific manner.

Nations had been historically formed. The Chinese nation, Mongolian nation, Korean nation, Japanese nation had not existed consistently from ancient time to modern time in the East Asia.

There cannot be a home country history education in nation-states without relation to nationalism.

Especially, in Japan which had begun her national formation invading other regions and other nations, and has build her nation continuously invading other regions and other nations, it is very important to educate Japanese invading criminal modern history.

Without doing so, educating Japanese history becomes agitating Japanese patriotism and nationalism.

The ancient East Asian history is the history of nation formation periods in the East Asia.

Qualities of nations in the ancient ages were not same with these in modern ages.

Territories of ancient nations in the East Asian were not the same as territories of modern nations.

The race of people who lived as persons of nations in the East Asian ancient times were various, and languages were various.

Nations of the East Asian ancient times were also multiethnic nations.

The method and the content of the historical fact recognition are provided for by person's history thought and historical view.

There were few Japanese who had thought and the historical consciousness opposing "Annexation(Colonization) of Korea" in 1910.

The education in the nation-state Japan has been the education that produce Japanese

people who affirm, support invading another regions and the another countries invasion.

The center of such an education has been a history education.

The teacher should devise the method of teaching the historical fact to the student and should recognize the historical fact with the student in the place of the history education. The history textbook is a tool for that. Do not misunderstand the description of the history textbook as the historical fact.

The teacher should talk about the method of the history for the true attainment with the student in the place of the history education. It is not easy to overcome the Japanese nationalism shown in the history textbook of Japan.

Many Korean students in Japan are made to use the history textbook of Japan at the school in Japan.

To revolutionize the history textbook of Japan is the task not only for Japanese people but also for Korean people in Japan.

This problem will be achieved in the people movement that aims at an international common history textbook description in the East Asia.